

■ 目 次

多文化関係学会第 10 回年次大会について	2
第 10 回年次大会へのご招待 2 大会・概要のご案内 3	
2011 年度年次大会研究発表募集について 5	
【特集】東日本大震災をめぐって	6
多文化関係学会からのメッセージ 6 東日本震災と私 6 震災現場ボランティア報告 7	
集団避難とその受け入れー双葉町の事例から 8 大会へのご案内 9	
2010 年度第 3 回・2011 年度第 1 回合併理事会議事録 抄録	10
学会会長交代に寄せて	11
新理事一覧	12
J SMR 「海外フォーラム」参加報告	12
自著紹介・書評	13
地区研究会報告	14
中部・関西 14 九州 16	
地区研究会案内	17
北海道 17 関東 19 中部・関西 22 中国・四国 23	
新入会員紹介	24
お知らせ	25
ハンガリーシンポジウム (2009) 抄録集刊行 25 web 委員会より 25	
関連学会案内と編集後記 26 【重要】事務局より 27	

■ CONTENTS

Announcements of the 10 th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations	2
Message from the Conference Chair 2 Conference Program (Proposed) 3	
Call for Papers 5	
Special on the Great East Japan Earthquake	6
Minutes of the Board Meeting	10
The New JSMR President	11
New Board Members	12
Report on the Association of Asian Studies Conference & East-West Center	12
New Publications	13
Report on the Local Study Meetings	14
Chubu・Kansai 14 Kyushu 16	
Announcements on the Local Study Meetings	17
Hokkaido 17 Kanto 19 Chubu・Kansai 22 Chugoku・Shikoku 23	
Introducing New Members	24
Announcements	25
Proceeding of the Symposium in Hungary 25 From the Webmaster's Committee 25	
Announcements & Editor's Notes 26 From the Business Office: Regarding Outsourcing Services 27	

大会委員長挨拶

多文化関係学会 第 10 回年次大会へのご招待

抱井尚子（青山学院大学）

このたびの東日本大震災により、被害に遭われた地域の皆様におかれましては、心よりお見舞い申しあげますとともに、一日も早い復旧と復興をお祈り申しあげます。

さて、多文化関係学会(JSMR: Japan Society for Multicultural Relations)の第 10 回年次大会が、来る 9 月 17 日（土）、18 日（日）に青山学院大学（青山キャンパス）で開催されます。また大会前日の 9 月 16 日（金）には、同キャンパスにおいてプレカンファレンス・ワークショップが開催されます。

多文化関係学会は、2002 年 6 月 22 日に青山学院大学で設立総会が行われ、その後 10 年を経て再び同大学で 10 周年記念大会を開催する運びとなりました。この 10 年間、国際社会においても日本国内においても、さまざまな「価値観」の衝突が生じ、それらを克服するべく共生への取り組みが、かつてないほど重要な課題となってきました。たとえば国際社会では、宗教的・経済的な価値観の対立がテロや武力衝突を引き起こし、日本もそれらの問題と無縁ではありません。また、便利さや豊かさを希求する人間の価値観が、人類と自然環境との共生を困難にしています。さらに本年に日本で起こった大震災は、科学技術に依存する現代社会のあり方に対して自己反省を促すとともに、日本文化において継承されてきた伝統的価値観の貴重さが改めて国際社会に評価されるきっかけとなった出来事であると言えます。

このような状況の中で開催される本大会においては、「多文化社会日本の課題—共生と衝突が織りなす^{ラプソディ}狂詩曲—」（“Challenges Facing Multicultural Society Japan: A Rhapsody Textured with Harmony and Dissonance”）という全体テーマを掲げました。一日目は、「共生と衝突」の概念に関する根源的な問い直しのきっかけとして、生物学者の福岡伸一先生による招待講演を予定しています。また、文化的な共生と科学技術とのかかわりについて考えるため、日本国内での多文化共生に関わる実践家と、情報技術分野の研究者を招いたパネルセッションを予定しています。二日目は、「文化」研究を行う上で大学院生が直面する課題を通して大学院教育のあり方について議論します。さらに、大震災の被災地からスピーカーをお迎えして、多文化共生の視点から、震災後に起こった諸問題や被災地の復興について、研究者や実践家がどのような貢献ができるのかという点について議論する予定です。その他にも、比較文化研究におけるバイアスの検証方法をテーマとする大会開催前日のプレカンファレンス・ワークショップ、日本らしさとヒップホップダンスの融合を目指したパフォーマンス実演を披露する懇親会も予定しております。

学会発足 10 年という節目の年に開催される本大会が、研究者および実践家の皆様にとっても、日本社会におけるさまざまな文化の「共生と衝突」について考え直す節目となれば幸いです。

2011 年度 年次大会・概要のご案内

【大会テーマ】

「多文化社会日本の課題—共生と衝突が織りなす^{ラプソディ}狂詩曲」

“Challenges Facing Multicultural Society Japan:
A Rhapsody Textured with Harmony and Dissonance”

9 月 16 日 (金)	<p>プレカンファランス・ワークショップ 14:00～17:00</p> <p>「比較文化研究におけるバイアスの検証法—入門編—」 青山学院大学国際政治経済学部・准教授 田崎勝也氏 (申し込み受付 早期申し込み先着順 30名)</p>
9 月 17 日 (土)	<p>研究発表 1 10:00～11:05</p> <p>休憩 11:05～11:15</p> <p>研究発表 2 11:15～12:20</p> <p>昼食休憩 12:20～13:20</p> <p>総会 13:20～13:50</p> <p>休憩 13:50～14:00</p> <p>招聘講演 14:00～15:05</p> <p>「多文化共生と動的平衡」 青山学院大学総合文化政策学部・教授 福岡伸一氏</p> <p>休憩 15:05～15:15</p> <p>パネルディスカッション 15:15～16:45</p> <p>「ICTが拓く多文化共生の未来」 多文化共生センターきょうと・代表 重野亜久里氏 和歌山大学システム工学部・准教授 吉野孝氏 コーディネーター：立命館大学政策科学部・教授 稲葉光行氏</p> <p>休憩 16:45～16:55</p> <p>ポスターセッション 16:55～17:45</p> <p>懇親会 18:00～20:00</p> <p>ORIENTARHYTHM KITE氏によるダンスパフォーマンス 立食パーティー</p>

	研 究 発 表 2 9 : 30 ~ 10 : 35
	休 憩 10 : 35 ~ 10 : 45
9	オープンフォーラム 10 : 45 ~ 12 : 15
月	「大学院教育を考えるー『文化』を学ぶ大学院生の現状と課題ー」 立教大学・上智大学・青山学院大学・お茶の水女子大学出身の 研究者および現役の大学院生
18	コーディネーター：青山学院大学・准教授 田崎勝也氏
日	昼 食 休 憩 12 : 15 ~ 13 : 15
(日)	震災ワーキンググループ 13 : 15 ~ 14 : 45 「被災地の声ーみえてくる多文化社会の課題と挑戦ー」 東北大学国際高等融合領域研究所・助教 李善姫氏 東北大学大学院教育学研究科(教育設計評価専攻博士課程後期)金井里弥氏 コーディネーター：埼玉大学経済学部・准教授 渋谷百代氏

○会場：

青山学院大学青山キャンパス (<http://www.aoyama.ac.jp/other/access/aoyama.html>)

- ・JR 山手線、東急線、京王井の頭線「渋谷駅」宮益坂方面の出口より徒歩約 10 分
- ・地下鉄「表参道駅」B1 出口より徒歩約 5 分

○参加費：

早期申し込み（2011年8月19日（金）までに振り込み）の場合

正会員 4,000 円、非学会員 6,000 円、学生会員 2,000 円、学生非会員 3,000 円

*勤務地および現住所が被災地区（青森県・岩手県・宮城県・福島県・茨城県）の方は、大会参加費が免除となります。

*多文化関係学会ホームページ(<http://www.js-mr.org/>)で内容をご登録した上でお振り込み下さい。

振込先：三井住友銀行青山支店 口座番号：(普) 7031534 口座名：多文化関係学会

<お振り込みの際は、参加者ご自身のお名前（の口座）をご記入ください。>

上記期間以降・当日受付の場合

正会員 6,000 円、非学会員 8,000 円、学生会員 4,000 円、学生非会員 6,000 円

（多文化関係学会ホームページ(<http://www.js-mr.org/>)で、内容を事前に登録して下さい。）

○プレカンファレンス・ワークショップ（早期申し込みのみ受付）

正会員 3,000 円、非学会員 5,000 円、学生会員 2,000 円、学生非会員 3,000 円

<お申し込みは、早期申し込みのみで、先着 30 名様限りとなります。>

<登録をされても、**8月19日(金)までに**、登録が完了していない場合はキャンセル扱いとなりますので、ご注意下さい。>

○懇親会費：

早期：正会員 4,000 円、非学会員 4,000 円、学生会員 2,000 円、学生非会員 2,000 円
当日：正会員 5,000 円、非学会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、学生非会員 3,000 円

○大会委員会連絡先<E-mail: jsmr2011taikai@gmail.com >

大会委員会・委員長 抱井尚子（青山学院大学）

第 10 回年次大会

2011 年度年次大会研究発表募集要項

- ・ 発表テーマ：本学会の趣旨に沿ったもので、未発表のものに限ります。
- ・ 発表時間：30 分（発表 20 分、質疑応答 10 分）
- ・ 申し込み締め切り：2011 年 6 月 24 日（金）

【申し込み要領】

ステップ 1：多文化関係学会のホームページ（<http://www.js-mr.org/>）の発表募集要項のページで、以下の事項をご入力下さい。

必要個人情報：氏名・所属・電子メールアドレス（お持ちでない方は電話番号）

➤ 発表枠を下記の 3 つから選択して下さい。

- 口頭発表
- 口頭発表（石井奨励賞/学生単独による発表）
- ポスターセッション

ポスターセッションは、1 日目 16:55~17:45 に専用時間を設定していますが、ポスター自体はご希望により 2 日間を通して掲示いたします。

➤ 発表タイトル

➤ 本学会の関連主要研究領域（社会・心理・言語・コミュニケーション・地域間研究）から 1 領域を選択して下さい。

➤ 使用機器類

ステップ 2：A4 サイズ用紙一枚で、発表概要（400 字~600 字）を添付ファイルとして電子メールにて大会委員会宛（jsmr2011taikai@gmail.com）に送って下さい。こちらも締切りは 6 月 24 日（金）です。

【注】石井奨励賞応募者は、申請書（多文化関係学会ホームページからダウンロード）を添付ファイルとしてお送り下さい。（発表概要記入欄は、申請書に組み込まれていますので、別途発表概要を提出する必要はありません）。

- ・ 採択決定通知：発表内容を大会委員会で審査し、お申込者全員に 6 月末日ごろまでに結果を電子メールにてご連絡いたします。7 月 11 日（月）までに採択結果が届かない場合は、大会委員会まで、メール（jsmr2011taikai@gmail.com）または電話（03-3409-8111 青山学院大学

抱井尚子研究室)でお問い合わせ下さい。

- 抄録の提出：口頭発表・ポスターセッション予定者は **7月31日(日)**までに発表内容の抄録を提出していただきます。なお、製本の都合上、A4サイズ用紙2枚または4枚のいずれかにまとめて下さい。抄録提出方法に関する詳細は、学会ホームページ (<http://www.js-mr.org/>) に掲載いたします。

第10回多文化関係学会大会委員会

e-mail : jsmr2011taikai@gmail.com

電話 : 03-3409-8111 (青山学院大学抱井尚子研究室)

【特集】東日本大震災をめぐって

【特集】東日本大震災をめぐって

多文化関係学会からのメッセージ

大震災関連 JSMR ワーキンググループの発足に向けて

久米昭元(立教大学)

2011年4月1日、ハワイにて East-West Center・JSMR Joint Forum の参加者約10名が集り、インフォーマルに話し合った結果、学会として大震災に関連したワーキンググループを作ってはどうかという案が浮上した。その後5月に開催された新旧合同理事会において、この案は満場一致で支持され、ワーキンググループは正式に始動と相成った(担当は渋谷新理事)。何が出来るか現時点でははっきりした見通しはないものの、一過性のものではなく、長期にわたって、地道に取り組んでいただけるのでは、と考えている。9月の年次大会では、会員諸氏と徹底した議論を重ね、社会貢献に向けた具体案が明らかになることを期待している。

【特集】東日本大震災をめぐって

東日本震災と私

李善姫 (東北大学)

仙台に住んで17年。この一帯ではすでに宮城沖地震が懸念されており、来日当時から「大きい地震が来るよ」と聞かされていた。来日から最初に経験した地震は、さすがに怖かった記憶がある。しかし、17年間の間たびたび地震に会っているうち、日本での地震は自然現象の一つ、日常の一つになっていたのである。そして、3月11日の地震。

地震の間、私の心配は、二人の子どもよりも、たまたま孫の卒業式を見に仙台に来ていた老母のことだった。子ども達は、学校や保育所の先生方が守ってくれる。だけと母は家に一人なのだ。揺れが落ち着いたら真っ先に車にのって家に向かった。普段は車で10分もかからない距離なのに、町に入った瞬間、道路は渋滞。ラジオでは津波の恐れがあるとさんざん言っていたが、そん

なことよりも家族の安否が先だった。路地を抜け、ようやく家の近くまで着いた。人々は皆、道路に出てきている。その中に下の子を抱えている夫の姿が見えた。長男が通っている小学校での引き渡し訓練の際に、夫と非常時の段取りを決めていたことが役に立った。

戦争の経験がある老母は、誰よりも落ち着いていて、保育所から昼寝の下着姿のままだった孫のため、服や布団まで用意して家から脱出していた。マンションの7階にある家は、爆弾が落ちた状態。地震対策をほとんどしていなかったせいだ。冷蔵庫からは食べ物が全部飛び出していて、茶箆筒からは皿やコップが落ちて割れている。おまけに箆筒は倒れ、電子レンジや炊飯ジャーも床に転がっている。割れたもので、足の踏み場もなく、靴のまま入って、とりあえず防災用カバンと水と食べ物を持ち出し、車に避難した。頭は真っ白で、何をすればいいのか。今後どうなるのか。私達はどこに行けばいいのか。何も頭に浮かばない。周りが暗くなってからようやく指定避難所に向かった。その時間に沿岸部で何が起きていたのかなど全く知るよしもなく……。

その晩から家に電気が通るまでは、避難所での生活。幸い私の家は災害三日目には電気と水道が戻った。避難所から家に戻った途端、息子は高熱で救急車のお世話になった。集団での生活で、インフルエンザに感染したようだ。津波による当地域の被害を実感し始めたのは、家に戻ってからだ。ようやくTVをじっくり見ることができた時、初めて大変な事が起きたのに気付いた。正直に新聞の紙面でも津波が襲ったことは知っていたが、やはり映像で見るのと訳が違う。何てことが起きたんだ。しばらくすると、家の電話も通じやすくなり、その後からは安否確認の電話が鳴りっぱなし。海の向こうの家族や友達の心配声を聴くたびに、我々の不安も高潮してきた。避難所で誰よりも毅然としていた母が、とうとう「韓国に帰ろう」と言い出し、17日には我々も母と一緒に一時帰国することができた。2週間後再び日本に向かう時、インチョン空港で母親は涙を流していた。今まで何十回も同じ別れをしてきたはずなのに……

それから再び4月7日の余震。その時は本当に心が折れた。今でも夜中の余震に無意識に反応し、娘を抱きあげ、息子の名前を呼んでいる自分がある。周りの人々の中でも同じ恐怖を感じている人は少なくない。それでも多くの人々はすでに日常を取り戻し、震災前の生活を営んでいる。一方で、近くには今なお多くの人大切な人を亡くし、家と職場を無くし、日常に戻りたくても戻れない状況が続いている。この非日常の空間の中で、日常の行動パターンで一日を過ごしていることに、隔たり感や罪悪感を感じているのは私だけではないだろう。余震や放射能の不安がないとは言えない。しかし、我々はこの中で生きるしかない。私は未だに自分に何ができるか一生懸命に考えている。未だ、行方不明の知人の家族にどう話をかければいいのか、その言葉さえも見つからないままであるが、一つだけは出来る事があるかも知れない。それは、この震災の記憶を残すこと。今は研究者としてできる唯一の事である。

【特集】東日本大震災をめぐって

震災現場ボランティア報告

前川仁之（立教大学異文化コミュニケーション学部生）

～4月1日から1週間、宮城県で支援活動を行った時の体験を寄稿してくれました。～
宮城県七ヶ浜町。この町の沿岸部は津波で壊滅状態になった。なぎ倒された電柱が民家の建材

を巻き込んで路上に盤踞している所などは、私の駆るマウンテンバイクでも通行困難だ。廃墟の中に無傷で建つ二階建て住宅を見つけたと思えばそれは百メートル向こうから丸ごと流されてきたものと知る。

そんな状況で、ある女性から「庭の部分だけでもきれいにしていただければ、重機で壊すこともなくなるので」と頼まれた私は、瓦礫とゴミとで境界を失ったかつての「庭」を再び庭にする作業にとりかかった。

ヘドロにまみれた競馬雑誌が出てくるがこの家に競馬ファンはそもそもいないのである。破壊された建材の下から出てくる手紙や書類の名を見ると合計三種類の姓が確認されるが、この家は三世帯で暮らしているわけでも、下宿屋をやっているわけでもないのである。向こう三軒の私有財産が流されてきて、この家の敷地をゴミ捨て場にかえてしまったのだ。中身がたっぷりつまった竹製の貯金箱が出てきた。これもその家のものではない。誰も口にはしなかったが、持ち主が現れることはおそくないのだ。庭の木の、根を残したものはいずれも臨終の変色をとげている。

そんな状態にあってもこの家のおかみさんは「庭のかたちだけでも」と言うのである。町のボランティアセンターから派遣されてきた六人は、金庫の撤去を終えるとさっさと行ってしまった。賢明である。

おじいちゃんが丹精込めてつくった庭だから。夥しいガラスの破片に目を細めて作業する私の胸にそんなことばが届く。休憩中、お嬢さんが庭の写真を見せてくれた。ありし日の庭を撮った写メールだ。庭仕事をするおばあちゃんを見まもる孫娘の目線が、そこにはあった。やがて作業を再開すれば、今度はこのお嬢さんの「せいかつかノート」が出てくる。本人に渡すと、懐かしそうに、友達に読んで聞かせて照れ笑う。

想いは復興の邪魔になる、と思わされた。しかし大事なことは、大震災を経てもなお、人々の繊細な想いが生き残っているという事実である。その想いを汲んだ復興という困難な作業こそ私たちに与えられた課題なのだ。

【特集】東日本大震災をめぐって

集団避難とその受け入れー双葉町の事例から

渋谷百代（埼玉大学）

今回の大震災の被災地には原発が立地する地域も含まれ、地震や津波の被害に加えて原発事故という大きな問題を私たちは抱えることになった。チェルノブイリ原発事故に匹敵するものとして海外からも注視される大規模な事故だが、事故をめぐり様々な日本社会の問題点が浮き彫りにされたという面でも日本にとって重大な意味を持っている。

そんな原発事故の影響で警戒区域に指定された原発の地元や近隣町村の住民は、帰宅の目処もつかないまま避難生活を続けている。福島第一原発5、6号機のある双葉町もそうした町の一つ。だが、他の町村が避難先を福島県内としている中で、双葉町は町役場機能を200キロ以上離れた埼玉県加須市に移動させ、住民も同市に集団避難させている。町民を一か所に集めたいということと、福島県内では避難者の雇用の確保が難しい状況であるということが、県を越えての集団避難という判断につながった。3月末、さいたまスーパーアリーナ（さいたま市）での10日間は

どの避難生活を経て、町役場と全住民の約2割にあたる1200人が加須市の旧騎西高校に移動、避難生活を開始した。

受け入れが決まった加須市は、1週間程度で施設整備を行うとともに、各種プロジェクトチームを設置し支援体制を準備（現在は各行政組織が担当）。町内会の回覧板などで市民の協力を仰ぎ、また双葉町民向けの求人の掘り起しなども行ってきた。より良い協力関係を築くためには双葉町のことをよく知ることが大切、という主旨で商工会青年部が中心となり双葉町写真展をコミュニティセンターで開催もしている。集団避難とその受け入れはここまでのところは順調に見える。

しかし、実際には約8割の町民は福島県内におり、コミュニティの維持を考えて集団避難を決めた町の意向とはかけ離れた現実がある。また、加須市に避難した町民の中でもコミュニティ維持ができるかは疑問である。避難先での就職をまだ躊躇する人がいる一方、すでに就職を決める人もいる。今後避難生活が長引けば、そうした違いによるグループが形成され境界が顕在化してくるだろう。また子供たちが加須市の学校に編入していることも、子世代のホスト社会への同化傾向の可能性や、彼らと親世代とのギャップを生み出すことにつながるかも知れない。集団避難によってコミュニティ維持をしようとしても、分裂したり変質してしまう可能性は大きい。

他方、受け入れ側の住民と「ディアスポラ」町民とのトラブルも、お互いのストレスが蓄積されてくれば発生・増加するだろう。既に噂に端を発した町民批判がネット上に現れ、町民優遇を懸念する声が市に届いているようだ。今後コミュニティ内およびコミュニティ間関係がどのように展開するのを見守りながら、多文化関係やメディアをフィールドとする研究者として貢献できる方法を考えたい。

【特集】東日本大震災をめぐって

ワーキンググループへのお誘い

渋谷百代（埼玉大学）

多文化関係学会として今回の大震災にどう対応・貢献するかを考えようと震災ワーキング・グループが始まりました。「多文化関係」と言っても研究テーマも手法も多様なので、まだ「産みの苦しみの段階ですが、メンバーで情報・意見を交換しながら少しずつ前に進めています。このニュースレターでは、まだ発展途上ではありますが視点の一部をご紹介します。ご興味をもたれた方、一緒に考えたいという方は、ご参加をお待ちしています。

またワーキング・グループのメンバーが話題提供しながら、多文化関係の研究者として震災にどう向き合うか一緒に考える機会が、関東地区研究会のセッションと年次大会のワークショップ（『被災地の声—みえてくる多文化社会の課題と挑戦』）であります。みなさまのアイデアをぜひ形にしたいと考えていますので、こちらもぜひご参加ください。

2010 年度第 3 回・2011 年度第 1 回合併理事会議事録 抄録

場所：青山学院大学（青山キャンパス）8 号館 4 階「国際研究センター会議室」

時間：2011 年 5 月 7 日 13：00～18：30

出席者（敬称略）：青木、赤崎、イングルスルー、大谷、抱井、久保田、久米、河野、小坂、
渋谷、田崎、田中、手塚、松田、李、石井

欠席者（敬称略）：浅井、ギブソン松井、小松、清、中川、松永、八島、渡辺、林

[報告事項]

- (1) 東日本大震災のため 2010 年度第 3 回の理事会が延期され、2011 年度第 1 回との合併開催となった。
- (2) 前回（2010 年度第 2 回）の議事録が承認された。
- (3) 事務局業務委託の経過報告
 - ・事務局の会員管理/会費徴収業務が横浜市の学協会サポートセンターに移行された。
 - ・ニュースレター第 18 号で個人情報の変更は今後学協会が行うと告知したが、これまで通り個人情報変更は各会員が学会ホームページより行う必要があることが確認された。会員が各自の登録情報を変更すると、会員管理担当理事と学協会とに同時送信される。
- (4) 10 周年記念出版準備経過報告
 - ・「多文化社会日本の課題：多文化関係学的アプローチ」（仮題）を今年度年次大会までに刊行予定。
- (5) 2011 年度年次大会（10 周年記念大会）について準備状況が報告された。
- (6) ニュースレター委員会報告
 - ・特集として東日本震災に関する記事を掲載する。
- (7) 地区研究会開催予定
 - ・北海道：8 月上旬開催予定。
 - ・関東：3 月から 7 月に延期し地震に関する内容を加える。
 - ・関西：7 月開催予定
 - ・中部：テーマ決定。日程未定。
- (8) 2010 年度年次大会の会計とアンケートの報告が行われた。
- (9) ハワイ East-West Center Forum とアジア学会の報告
 - ・3 月 30 日に本学会とハワイ East-West Center とのジョイントフォーラムが行われ、4 月 3 日に AAS/ICAS Conference において本学会員 5 名によるパネルセッションが行われた。
- (10) ハンガリーシンポジウム（2010.3）の Proceedings 刊行が報告された。
- (11) 学会誌編集委員会より報告

[審議事項]

(1)未決定であった2名の理事が選出された。

(2)新年度理事の役割分担

会長：松田陽子、副会長：ジョン・イングルスルド、李洙任、財務：渋谷百代、監事：西原鈴子、舛谷鋭の各氏が選出された。その他の理事の役割については、メール等による審議で決定することとする。

その他

次回理事会：年次大会のプレカンファレンスの後に開催の予定。

学会会長交代に寄せて【新会長挨拶】

松田陽子（兵庫県立大学）

多文化関係学会の創設以来、学会の育成に熱い情熱を傾け、過去4年間は第三代会長としてご尽力くださいました久米昭元氏の後任として、このたび、2011-12年度の会長に選出されました。学会創立10周年という節目の年に、これまでの基礎固めの過程を振り返り、次の10年に向けて新たな道を拓いていく大切な時期を迎え、肩の荷をどっしり重く感じております。

私は、この10年間の学会活動を通じ、本学会が、多文化化の急速に進行する21世紀の日本において重要な役割を担うべき組織となっていかなければならないという思いを抱いてきました。そして、学会の進むべき方向性の柱として、以下の二つのことを考えております。

まず、多文化の関係性をめぐる問いや課題を考究する学会として、学際的、重層的、複眼的アプローチを重視しつつ、各人が確固とした研究の深化・体系化を目指すことをサポートすると同時に、多様な文化を背景とする人々や社会が直面する複雑な課題と向き合い、よりよい多文化社会の構築に向けた社会实践につながる研究活動を志向する人々の研鑽の場を提供するということです。もう一つは、本学会が多様な知の在り方や行動力を持った人々の協働による「多文化シナジー」を体現できる場となることです。学際的な学会であるため、専門分野や研究方法、関心の所在もさまざま、それによる難しさというものも実感しておりますが、その多様性が本学会の強みでもあると思います。各自の研究方法や認識の仕方が自明のこととして存立するのではなく、お互いに確認し合い、議論し合い、刺激し合うことで、新たな視点が見出されていくような、豊かな創造力を生み出す学会となること、また、国内外での研究活動を通じて多様な方々との魅力的な出会いをもたらす学会として、発展していくことを願っております。

最後になりますが、東日本大震災で被災された方々に心からのお見舞いを申し上げますとともに、今、この苦難の時に、多彩な研究者の集まりである学会として何をなすべきかを考え、研究に取り組むことが喫緊の課題であるという気持ちを皆様と共有し、行動計画の第一項目にとりあげていきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

新理事一覧

役職	氏名	所属
会長	松田陽子	兵庫県立大学
副会長	John Ingulsrud	明星大学
副会長	李洙任	龍谷大学
	赤崎美砂	淑徳大学
	浅井亜紀子	桜美林大学
	大谷みどり	島根大学
	抱井尚子	青山学院大学
	Voltaire Garces Cang	(社) 倫理研究所
	久保田真弓	関西大学
	小坂貴志	神田外語大学
	渋谷百代	埼玉大学
	清ルミ	常葉学園大学
	高濱愛	一橋大学
	田中共子	岡山大学
	手塚千鶴子	慶應義塾大学
	中川慎二	関西学院大学
	松永典子	九州大学
監査	西原鈴子	元東京女子大学
	舛谷鋭	立教大学

※会長・副会長以外は、あいうえお順

※監査は理事ではない

JSMR「海外フォーラム」参加報告

小松照幸(企画担当理事)

2009年3月に多文化関係学会として初の海外フォーラムがブダペスト商科大学で開催された。フォーラムは、ヒダシ・ジュディット海外渉外理事(ブダペスト商科大学・学部長)の尽力で可能となった。フォーラム開催の目的は、これまでの学会の研究成果と蓄積に基づき、海外の学会や大学の研究者・教育者と議論(意見交換)することにある。つまり、海外で他流試合を行いチ

チャレンジ精神を発揮することでもある。この海外フォーラムでは、日本側参加者 10 数名と、ブダペスト商科大学の多数の参加者により、実りある研究発表と議論が行われた。また研究会後の史跡や文化遺産へのツアーは、楽しい文化学習イベントとなった。(詳細については、ニューズレターNo.15 参照。) また、本年 4 月には、松田副会長の編集により参加者の自費による約 100 頁の抄録 (Synergy of Cultural Dialogue) が発刊された。

2011 年 3 月には第 2 回海外フォーラムとしてハワイで 2 つの国際的共同研究会に参加の機会を得ることができた。1 つめは、3 月 30 日に行われた East-West Center での共同フォーラムへの参加 (JSMR 12 名: 稲葉光行・ESCHBACH-SZABO Viktoria・抱井尚子・ギブソン松井佳子・小松照幸・久保田真弓・久米昭元・渋谷百代・田中共子・長谷川典子・Hidasi Judit・松田陽子) で、2 つめは、4 月 3 日にハワイ・コンベンションセンターで開催された「アジア学会のパネルセッション」への参加 (JSMR 5 名) であった。

EWC でのフォーラムは参加者 22 名により行われ、Exploring Common Agenda for Multicultural Relations in Asia & Pacific というタイトルのもと熱い議論が交わされた。司会はヒダシ・ジュディット氏で、JSMR 側からはギブソン松井佳子、久保田真弓、松田陽子諸氏がプレゼンを行った。会議中「多文化社会資本」という新しい概念などが提唱されたが、時間的制約もあり、概念の吟味は次回に持ち越しといった感があった。次に、アジア学会年次大会における JSMR 代表によるパネル・セッションは、“Synergy of Intercultural Contact: Past, Present, and Future” というテーマで行われ、内容と発表者は以下の通りである。

1. Opening Remarks (小松照幸、名古屋学院大学)
2. Overcoming Value-Relativity, Finding Common Ground; Why Synergy from Continuous Intercultural Dialogue Matters (ギブソン松井佳子、神田外語大学)
3. Cross-Cultural Social Skills Learning: Cross-Cultural Psycho-Education for Developing Cross-Cultural Interpersonal Relationships (田中共子、岡山大学)
4. Kontaktologies in a New Way (Viktoria Eschbach-Szabo, Univ. of Turbingen)
5. Discussant (Judit Hidasi, Budapest Business School)

ここでの発表内容は多様であり、要点をあげるとすれば、文化相対主義の先にある、Transcultural な発想と行動のぎりぎりの着地点を見極め、現実的な解決方法を探る議論であった。

自著紹介・書評

●灘光洋子 (紹介者・分担執筆)

1) 『異言語と出会う、異文化と出会う』(2011 年 3 月刊行)

成蹊大学文学部学会編 289 頁 風間書房

異なる専門領域の研究者が集い、医療通訳、語学教育、自文化観察、翻訳、自然観など様々なテーマを取り上げることで、言語と文化の交換と変容をめぐる問題を論じた一冊。「異文化」「差異」「遭遇」「摩擦」を基本概念とし、言語を異にする文化間の接触に伴い生じる他者認識や自己形成のプロセスについて考察している。

2) 『現代日本のコミュニケーション研究：日本コミュニケーション学の足跡と展望』

(2011年4月刊行) 日本コミュニケーション学会編 314頁 三修社

日本におけるコミュニケーション学の研究、教育の歩みが総括的に整理されており、コミュニケーション研究者にとっては必読の新刊。対人コミュニケーション、組織コミュニケーション、異文化コミュニケーション、コミュニケーション教育、レトリック、コミュニケーション学の問題系の各章で、ポイントをまとめると同時に今後の発展のための問題提起も行っている。

●李洙任 (紹介者・分担執筆)

1) 『在日コリアン辞典』(2010年11月)

国際高麗学会日本支部編集委員会編、朴一 編纂委員会代表 456頁 明石書店

在日コリアンが日本で暮らし始めてから1世紀が経過し、これだけ在日コリアンへの関心が高まり、研究者が増加しているにもかかわらず、未だに在日コリアンが日本の人々に正しく理解されているとは言いがたい現実が存在する。この辞典は、こうした反省をふまえ、在日コリアンの歴史、政治と経済、社会と文化などについて、できるだけ客観的な情報を提供し、また日韓・日朝関係の100年を検証する試みである。

2) 「京都の伝統産業に携わった朝鮮人移民の労働観」(2011年2月)

龍谷大学大学院経営学研究科付置機関 京都産業学センター「京都産業学を創る」編集委員会編『京都産業学を創る』218頁 晃洋書房

京都には「伝統」と「革新」を繰り返し、長期に亘って継承された伝統産業が多く存在する。第13章では、西陣産業に参入した朝鮮人の西陣職工について紹介する。朝鮮人が置かれた労働環境とエスニシティの関係性に焦点を当て、京都における西陣産業に携わる朝鮮人移民の労働観を報告している。

地区研究会報告



■中部・関西地区研究会報告

日時：2011年2月20日(日) 14:00~17:00

会場：龍谷大学 大阪梅田キャンパス

テーマ：「対人コミュニケーションにおける自己開示、自己提示」

私たちは日常的な他者との相互作用において、自分自身の欲求や感情のおもむくままに発言したり、行動したりしているわけではなく、常に他者の目を意識して自分自身の表出行動を観察し、その社会的適切性を判断してコントロールしています。今回の研究会では、中川氏、守崎氏から自己提示や自己開示をテーマに、日韓のビジネスパーソンのコミュニケーション比較分析や自己開示の概念化について学習する機会となりました。報告概要は以下です。

話題提供者：中川典子氏（Noriko Nakagawa）（流通科学大学）

表題：「日本人ビジネスパーソンと韓国人ビジネスパーソンの自己開示に関する比較文化的研究」
“Cross-cultural Study between Japanese and Korean Business People on Self-disclosure”

本発表は、比較文化心理学的視点から、日本と韓国のビジネスパーソンの自己開示という対人行動における類似点と相違点を、開示者と開示相手との職場の地位に反映された関係性、および、自己開示の場としての酒席という2つの状況要因に着目しつつ、探索した発表だった。

発表の構成は4つの研究、すなわち、研究1：日本人ビジネスパーソンを対象にした自己開示調査－開示相手の職場の地位、開示の場、開示者の年代差の観点から－、研究2：日本人ビジネスパーソンと韓国人ビジネスパーソンを対象にした自己開示に関する量的調査(1)－開示相手の職場における地位、開示の場としての酒席、および自己開示の話題の観点から－、研究3：日本人ビジネスパーソンと韓国人ビジネスパーソンの自己開示に関する量的調査(2)－対象者にとって自己開示、仕事仲間との会話、酒席がもつ意味－、研究4：日本人ビジネスパーソンと韓国人ビジネスパーソンの自己開示に関する質的調査からなっていた。

研究1は、1995年4月に発表者が行ったアンケート調査に、研究2と3は、1998年4月から11月に日本の関西圏とソウルで行ったアンケート調査に、研究4は2004年6月から2005年2月に日本の関西圏とソウルで行ったアンケート調査に基づく分析であるというように、発表は発表者が長年にわたり蓄積した研究の総括であり、その凝縮度は発表時間内では消化しきれないほどだったが、先行研究を踏まえ反省を加えた問題設定や、これまで、集団主義的な「アジア人」というカテゴリーで括られてきた日本人と韓国人に対し、「その微妙かつ重要な社会行動における類似点と相違点」を明らかにしようというチャレンジは極めて興味深いものだった。

全体を通して、「話題：趣味・嗜好、仕事、人格、家族、身体、社会問題、金銭」や、部下、同僚、上司といった開示相手の職場における地位、酒席、開示相手の年代などが、自己開示傾向に影響を与えることが示され、日本人が確かに「飲みニュケーション」していること、日韓において共に酒席では広範な話題において自己開示度が高いことが実証された。

発表では各アンケート調査やインタビュー調査の結果が詳細に分析され、日韓の共通点や相違点が示されたが、共通点において、特に印象深かったのは、日韓共に「タテ」意識の強い伝統的価値観が崩れつつあるのではないかという指摘である。



相違点としては、韓国人は社会問題に対する関心度と自己を明確に表現することを好む傾向にあること、金銭に対する態度の相違、日本人が、より自分を語るという行為において対人志向的、場依存的傾向が強く高コンテキストであるのに対し、韓国人はより言語への依存度が高く、日本に比べ低コンテキストである可能性の指摘が興味深かった。

筆者の研究地域は中国であり、中国に置き換えて見るとどうなるのか考えさせられることも多く、本発表から多くの示唆を受けることができた。

文責：花澤聖子（神田外語大学）

話題提供者： 守崎 誠一氏 (Seiichi Morisaki) (神戸市外国語大学)

表題：「自己呈示に関わる比較文化研究」 “Cross-Cultural Studies of Self-Presentation”

守崎先生は、当日お風邪を召されており、「今回の発表はわかりにくいかもしれないが、風邪なのでご容赦願いたい」とのご挨拶から本発表は、始まった。実はこれがご発表のテーマである自己呈示の方法のひとつで、具体例を持って参加者の心をぐっと掴み守崎ワールドである自己呈示に関する文化比較研究の難しさと面白さに引き込まれた感じであった。



自己呈示について実証的に日米比較するには、自己呈示の概念を明確にするだけでなく、文化比較研究にともなう種々の注意点に留意する必要がある。それを先生ご自身のご研究の知見を踏まえて解説していただいた。その際に特にいくつかの仮説を立て、その仮説が立証できなかった事例を取り上げ、「なぜか」と参加者に問いながら説明されたのが印象的であった。すでに分かっていることを簡潔に教えてもらうのではなく、先生ご自身の試行錯誤の経緯を一緒に追うことで、研究アプローチそのものも理解できる講演であった。

文責：久保田真弓 (関西大学)

■九州地区研究会

日時：2011年3月3日(土) (13:00~17:30)

会場：九州大学・伊都キャンパス比文・言文教育研究棟第8ゼミ室

テーマ：「社会構成主義版グラウンデッド・セオリー」研究法ワークショップ

“Research Methodology Workshop in Social Constructivist Grounded Theory”

話題提供者：平山修平氏 (Shuhei Hirayama) (青山学院大学)

多文化関係学会九州地区研究会では、今回「社会構成主義版グラウンデッドセオリー研究法：CGTA」のワークショップが行われました。全部で25名ほどの学生と外部の研究者の方が参加しました。「グラウンデッドセオリー」とは、グレイザーとストラウスの『データ対話型理論の発見』の中で、データに根差した研究から理論を生成することとされています。今回のワークショップでの「社会構成主義版」はグレイザーとストラウスに直接師事したシャーマズにより、グラウンデッドセオリーアプローチをさらに発展させたものとなっているとのことでした。

具体的な特徴として、「シンプルで柔軟なガイドライン」「データ収集と分析が並行して行われる」が挙げられており、以下の手順と注意点が提示されました。

- 1 データを収集する
- 2 ある場面から得られたコードを、他の似たような場面にも適用できるか検討する
- 3 コードの抽象度をあげ、広範囲のデータを説明する中心のカテゴリー（概念）を作り上げる
- 4 創発しつつあるカテゴリーが不完全だとわかったら、分析を中断してデータ収集を行なう
このことを踏まえて、グループに分かれ、実際のインタビューデータを使いグラウンデッドセオリーを生成するまでの作業をしました。作業の段階は：行ごとのコード化→行ごとコードを比較・分類、焦点化されたコードを生成→焦点化されたコードを比較・分類し、カテゴリーを生成

→メモ書き→カテゴリー間関係の考察→全体プロセスを解釈し名前をつける→最終的にグラウンデッドセオリーの生成となります。

途中、各グループの代表者がコード化、カテゴリー、メモ書きの発表をしていきました。各グループのそれぞれに違う分析結果を聞いて会場も盛り上がりました。各グループの分析をひとつおき聞いた後で、平山先生の解説と解釈がありました。それを聞いて、より考え抜かれた解釈に、なるほどそのようにするのかと会場も感心した様子でした。

このワークショップ前に GTA について本を何冊か読んでいたのですが、私個人の感想としましては、本を何冊も読むよりも、1 回のワークショップの方が GTA については理解が深まるのではないかと思います。本だけの理解で研究をやろうとすると自己流になりがちです。したがって、GTA については、本を読んで、もちろん基礎的なことは事前に押さえておくことは大事ですが、ワークショップに参加すると、その方法について道筋をふみはずすことなく理解できるのではないかと思います。また、M-GTA など、GTA についてはいくつかバージョンがありますが、CGTA も M-GTA も本質的なものは同じで、そう大きく変わらないと講師の平山先生はおっしゃっていました。これから、インタビューデータなどを用いて質的研究を進めたい学生や研究者にとって大変有意義なワークショップになったのではないかと思います。



文責：福元千秋（九州大学大学院比較社会文化学府院生）

★ 地区研究会のご案内 ★

★ 北海道・東北地区研究会 ★

日時：2011年8月6日（土）14：00～17：00

会場：北星学園大学 (Hokusei Gakuen University) 第一会議室

テーマ：異文化接触再考：ミクロとマクロの視点から

Rethinking Intercultural Contact: From Micro- and Macro-Perspectives

申込み先：北星学園大学 長谷川典子 (hasegawa@hokusei.ac.jp)

話題提供者 (1)：山本志都氏 (Shizu Yamamoto) (青森公立大学)

「異文化接触における相互作用を学習体験化するコミュニケーションを考える」

“Communication which makes Intercultural Interaction into Learning Experience”

【概要】

異文化間能力の研究は、異文化間の状況において効果的なコミュニケーションや適切な対処のできる能力に関し、適応力、寛容性、感受性、関係調整能力など様々な側面からアプローチされてきた。その一方で、異文化間能力では、知識や能力が何らかの学習を通して獲得されていると

考えられるにもかかわらず、この学習過程を概念化する研究が欠けていたという指摘もある。数少ない学習の観点からアプローチする研究であっても、まず修得されるべき能力があるという前提で、そこへ到達するまでの学習過程を明らかにする、つまり、能力の獲得に伴い変容していく発達過程をモデル化する研究が一般的である。本発表では、異文化接触を学習過程そのものとし、異文化接触の体験を学習の機会として最大限活用することができるような、「異文化接触における相互作用の学習体験化を可能にするコミュニケーション」という視座を提示し、実証研究の結果に基づき論じたい。

【プロフィール】

青森公立大学経営経済学部 准教授。関西外国語大学外国語学部米英語学科卒業、Portland State University 大学院 Speech Communication 学科修了 M.A. (専攻: 異文化コミュニケーション・組織コミュニケーション)、上智大学総合人間科学研究科教育学専攻博士後期課程修了 Ph.D. 専門は異文化コミュニケーション、異文化トレーニング、対人コミュニケーション、組織コミュニケーション。主著には『異文化間協働におけるコミュニケーション: 相互作用の学習体験化および組織と個人の影響の実証的研究』単著 ナカニシヤ出版(2011)、『異文化コミュニケーション・ワークブック』共著 三修社(2001)がある。

話題提供者 (2) : 松田陽子氏 (Yoko Matsuda) (兵庫県立大学)

「オーストラリアにおける多文化主義政策の課題と可能性」

“Multiculturalism in Australia: The Challenges of Change”

【概要】

移民大国オーストラリアは、1970年代に白豪主義から多文化主義へと政策転換を行った。オーストラリアの多文化主義政策について、どのような理念に基づき、どのような経緯で策定され、どう変容してきているかを、市民社会からのボトムアップの力と政府のトップダウンの力、国内の社会・経済・文化的要因、国際環境要因の観点を踏まえて考察する。そして、具体的な社会政策として何を実現し、何が実現されていないのかについて考え、オーストラリアの多文化主義の柱である「多文化の尊重、社会的公正、経済的効率性」の三つの観点をめぐる葛藤や課題や批判、さらに「豊かさのための多様性(Productive Diversity)」に向けた政策の意義と問題点を取り上げる。また、多文化化が急速に進行する日本社会の課題も照射しつつ、日本にとって多文化主義を考えることの意味を議論したい。

【プロフィール】

兵庫県立大学経済学部国際経済学科教授。大阪大学文学博士 (社会言語学)。オーストラリアの言語政策と多文化主義、日本語教育、異文化コミュニケーション、外国人児童の教育支援等の研究に従事。主著: 『多文化社会オーストラリアの言語教育政策』ひつじ書房 (2009)、『オーストラリアの言語政策と多文化主義-多文化共生社会に向けて』兵庫県立大学経済経営研究所 (2005) 等。

★関東地区研究会★

3月12日に予定されていた関東地区研究会「朝鮮半島への多視点的アプローチ」が、東日本大震災のため延期され、7月18日に開催されます。震災を多文化関係から今後の課題を探究するために、年次大会の震災ワーキンググループのプレセッション「多文化の視点からみる東北大震災と今後の課題」を、もう一つのセッションとして開催します。

日時：2011年7月18日（月・祝日） July 18 (Mon) 11:30～18:00

会場：立教大学太刀川会館1階第1会議室

テーマ：第一セッション「多文化の視点からみる東日本大震災と今後の課題」

（年次大会企画 震災ワーキンググループプレセッション）

第二セッション「朝鮮半島への多視点的アプローチ」

参加費：無料。研究会終了後、懇親会を予定しております

（18:30～20:30 立教大学第1食堂2階の藤だな 懇親会費 2500円程度）

申込方法：下記の申し込み要領に従って、担当者 浅井亜紀子 asai@obirin.ac.jp までご連絡ください。タイトルに「関東地区研究会申し込み」と記入してください。懇親会に参加される方は、7月10日（日）までに申し込みをお願いします。

氏名、所属、メールアドレス

申し込み内容 3つのうち1つを選んでください

- 1 研究会・懇親会に参加します
- 2 研究会のみに参加します
- 3 懇親会のみに参加します

第一セッション：「多文化の視点からみる東日本大震災と今後の課題」

（年次大会企画 震災ワーキンググループ 「被災地の声—みえてくる多文化社会の課題と挑戦—」のプレセッション）

9月の年次大会で開催する震災関連ワークショップ「被災地の声—みえてくる多文化社会の課題と挑戦」のプレセッション。まず被災地でのボランティア活動の経験を紹介する。続いてワーキンググループで収集した情報を提供した上で、参加者による意見交換を行う。（大震災関連 JSMR ワーキンググループ特集の記事もご参照ください。）

This is a preconference session for the Tohoku Earthquake Workshop in the Annual Conference of JSMR held in September. The session starts with a volunteer's report by Mr. Saneyuki Maekawa, followed by discussion among participants. Some information from Working Group members will be shared as a guide for discussion. (Please see also the feature articles on the JSMR Working Group on Disasters)

【13:30～14:00】

震災現場でのボランティア報告

“Volunteer's Report from the Devastated Site”

前川仁之氏（立教大学） Saneyuki Maekawa, Rikkyo University

現在、立教大学異文化コミュニケーション学部4年に在籍。4月1日から一週間、東日本大震災の被災地のひとつである宮城県で支援活動を行った。

Saneyuki Maekawa is a senior-year student at College of Intercultural Communication, Rikkyo University. He participated in volunteer service in Miyagi, one of the most disaster stricken areas in this Tohoku Earthquake, for one week from April 1.

【14：00～14：50】

東日本大震災について話題提供とディスカッション

“The Tohoku Earthquake and Issues around Migration”

渋谷百代氏（埼玉大学）Momoyo Shibuya, Saitama University

埼玉大学経済学部准教授。専門は国際コミュニケーション。近年は、異文化対立における国際メディア戦略、メディアとしての日系人資料館、多文化の場におけるサービス提供者のコミュニケーション行動分析、などのプロジェクトを中心に研究活動を行う。著書に *Interethnic Attitude that Matters* (2010)。

Dr. Momoyo Shibuya is an Associate Professor in the Faculty of Economics, Saitama University. Her recent research projects are: media strategies for cultural conflicts; history museums of Japanese immigration as media; and behaviour analysis of service providers in multicultural settings. She is the author of *Interethnic Attitude that Matters* (2010).

第二セッション：「朝鮮半島への多視点的アプローチ」

【15：00～16：20】

話題提供者1：マーク・E・カプリオ氏（立教大学）(Mark E. Caprio, Rikkyo University)

発表テーマ：「複合的視点から見た朝鮮半島問題」

“Viewing Korean Peninsula Issues through Multiple Lenses”

【概要】 Outline

最近の北朝鮮による韓国・延坪島（ヨンピョン島）砲撃についての第一印象は、危険であり、許すことが出来ない行為であり、愚行に近いというものであった。北朝鮮は、隣国の市民の誘拐や核兵器開発、国際的に禁止されている行為の参加者である。そのような国家が存在して良いのか、という問いがしばしばなされている。このような疑問は、前述した行為から主張されているわけだが、歴史的観点や相手側から見ると過激な北朝鮮は合理的なのである。そのように考えると、批判されている世界的問題の平和的解決は理解次第であり、孤立している犯罪国家・北朝鮮という限定された認識から転換することを助けることになる。

The recent shelling by North Korea of the South Korean island of Yeonp’yeong suggests at first glance a dangerous and unforgivable act by a state that treads on the verge of lunacy. This state kidnaps the citizens of neighboring states, develops nuclear weapons, and participates in a number of internationally tabooed activities. Does such a state deserve to exist, is a question frequently asked. This presentation will argue that the above activities are within the realm of understanding, though extreme they are rational if viewed objectively and from a historic perspective. It further stresses that peaceful resolution of this critical global problem is contingent on an understanding that supersedes the limited North

Korea-as-sole-culprit thinking.

【プロフィール】 Profile

マーク・E・カプリオ教授は、2001年ワシントン大学にて朝鮮史研究により博士号を取得する。主な著書として *Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945* などがある。また、日本の朝鮮人帰国事業や北朝鮮の核開発問題にも取り組んでいる。

Mark E. Caprio earned his doctorate degree in Korean history at the University of Washington in 2001. He is the author of *Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945*. He has also published widely on Japan-based Korean post-liberation repatriation and North Korea's nuclear program.

【16 : 35～17 : 55】

話題提供者 2 : イ・ヒャンジン氏 (立教大学) (Lee Hyangjin, Rikkyo University)

発表テーマ : 「日本における韓国大衆文化と在日

“The Korean Wave and re/presentation of Koreans in Japanese popular culture”

【概要】 Outline

2004年の韓国ブームは日本メディアの社会的現象となった。しかし、韓国のテレビドラマの毎日の放送、テレビでのアイドル登場、小学校の給食でのキムチのいためご飯や若い女性たち間で人気の週末の韓国旅行はもはや驚きではない。韓国人としての出自の話題を正直に話をする韓国のティーンエイジャーも珍しくはない。戦後、相撲取りの力道山はコリアンの出自を隠し続け死後に明らかになったが、かつてはコリアン名を名乗ることは民族的差別に対する抵抗の象徴であった。本発表では、韓国ブームが日本でのコリアンのイメージをどのように変えたかを議論し、コリアンやそのアイデンティティーがどのようにメディアで表象されているのかを検討する。

The fever of the Korean Wave in 2004 was a social phenomenon in the Japanese national media. It is not difficult to meet teenagers who frankly talked about their Korean ethnic origins. Only a few years ago, Japanese popular culture icons of Korean descent often hid their ethnic origins. For instance, Rikidozan, a legendary pro-wrestler in post-war Japan, never admitted his ethnicity and his Korean roots were only revealed posthumously. The popularity of the Korean Wave proves the power of popular culture to change and challenge racial discrimination in multicultural Japan. This study will examine the Korean Wave and the transnational cultural flows between Japan and Korea and focus on the media presentation and representation of resident Koreans and their identity.

【プロフィール】 Profile

立教大学教授。英国国立シェフィールド大学客員研究員。専門は東アジア映画と大衆文化研究。著書に *Contemporary Korean Cinema: Identity, Culture and Politics* (現代韓国映画：アイデンティティー、文化と政治) 『韓流の社会学：ファンダム、家族、異文化交流』他。

Dr. Hyangjin Lee is a professor of sociology in the College of Intercultural Communication at Rikkyo University, Japan and an honorary researcher in East Asian Culture at the University of Sheffield. She is the author of *Contemporary Korean Cinema: Identity, Culture and Politics*, Manchester University Press (2000) and *Sociology of Korean Wave: Women, Family and Fandom*, Iwanami (2008).

【18 : 30～20 : 30】 懇親会 (立教大学第1食堂2階の藤だな 懇親会費 2500円程度)

★中部・関西地区研究会★

テーマ：「日本社会と朝鮮学校：言語、文化継承の視点から」

共催：異文化コミュニケーション学会関西支部

日時：2011年7月17日（日）14：00～17：00

（終了後に懇親会を予定しています。懇親会参加費 3000 円程度。）

会場：龍谷大学・大阪梅田キャンパス

〒530-0001 大阪市北区梅田2-2-2 ヒルトンプラザウエストオフィスタワー14階

TEL：06-6344-0218 FAX：06-6344-0261

*交通は以下のホームページ・アクセスマップをご覧ください。

交通：http://career.ryukoku.ac.jp/osaka_campus/access/index.html

参加費用：無料

申込み方法：李洙任(Soo im LEE)（龍谷大学）

lee@biz.ryukoku.ac.jpまでメールかファックスでお知らせください。

懇親会の参加の有無も合わせてご連絡ください。 FAX: 06-6658-4642

話題提供者(1)：田中宏氏(自由人権協会代表理事)

テーマ：「高校無償化の朝鮮学校除外に見える日本の多文化共生」

“Multicultural Coexistence in Japan as Seen in the Policy of Tuition-Free High School Education and the Exclusion of Korean Schools”

【概要】

高校無償化法は、民主党政権が打ち出したもので、唯一実現したものといえよう。すなわち、子ども手当、高速道路無料化、農家の個別補償のいずれも迷走している。高校無償化では一条校のみならず、専修学校高等課程及び外国人学校をも対象としたことは、画期的である。なぜなら、従来から外国人学校は冷遇されてきたが、今回はまったく同等に扱われ、しかも国費が投入されたのである。

外国人学校31校は指定された（インターナショナル・スクール17校、ブラジル学校8校、中華学校の2校など）が、朝鮮高校10校は指定されないまま1年が過ぎた。この朝鮮学校除外は、例えば、大阪府は補助金を初・中には支給するが高校は除外するなど、地方自治体にも波及している。

外国人学校、朝鮮学校の存在を、日本における多民族・多文化共生のなかに位置付け、問題の所在を考えてみたい。

【プロフィール】

一橋大学名誉教授。一橋大学大学院経済学研究科修了。経済学修士（一橋大学）。元龍谷大学特任教授。専門は日本アジア関係史、ポスト植民地問題。著書に『在日外国人新版』岩波書店(1995)、『日韓・新たな始まりのための20章』（共著）岩波書店(2007)など。

話題提供者(2)：柳美佐氏（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程院生）

テーマ：「在日朝鮮学校児童の継承語習得過程

—初級部3年生の二言語作文から見えてくるもの（中間報告）—

“The Process of Heritage Language Learning among Children in Korean Schools: Insights from Bilingual Compositions by Primary Third Graders (Progress Report)”

【概要】

日本語を母語とする在日コリアン3世・4世のうち朝鮮学校で学ぶ児童は、小学校に入学して約一年後には継承語である朝鮮語のみで学校生活をほぼ支障なく送れるようになっている。トータルイマージョン方式により第二言語として朝鮮語を学びつつ、同時に教科学習をしてゆく児童の二言語習得過程はどのようなものであろうか。

本報告は、初級部三年生による朝鮮語・日本語二言語作文を通して、児童が三年間のイマージョン教育を通して身につけた、両言語での書く力に関する中間報告である。また作文の内容から、児童が朝鮮学校に対してどのような認識を持っているのかについても同時に考えたい。

【プロフィール】

京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程共生人間学専攻 外国語教育論講座院生。
研究分野はイマージョン方式による継承語教育、第二言語習得。

★中国・四国地区研究会★

テーマ：「在日コリアン研究における心理学的な視点の可能性を探る—二文化への態度を読み解く—」

“Probing the Feasibility of Psychological Perspectives in Research on Korean Residents in Japan: Understanding Attitudes Toward the Two Cultures.”

日時：2011年11月6日（日）10：00～12：00（予定）

会場：岡山大学・文化科学系総合研究棟・総合演習室2

（交通案内：<http://www.okayama-u.ac.jp/user/hss/access/access.html#koutuu>）

話題提供者：李正姫氏（イジョンヒ）（Lee Jung Hui）

（就実大学人文科学部・韓国語非常勤講師、岡山大学社会文化科学研究科博士課程）

【プロフィール】

韓国出身で、現在日本において韓国語教育に携わりながら、大学院博士課程に在籍して研究活動を行っている。韓国では日本語教育に携わり、日本語と韓国語の両語学の長い教育キャリアを持つ。日本においては時に通訳として活動し、両国をつなぐ社会貢献の担い手となっている。現在の研究的な関心は、在日コリアンにおける二文化への態度を心理学的に読み解いていくことである。

【概要】

在日コリアンに関する、心理学的な研究視点の持つ可能性を探っていきます。従来、社会や教育などの分野では盛んに取り上げられてきた在日コリアンですが、心理学的な研究は極めて乏しい現状にあります。在日コリアンでは、二つの文化をどう個人の中で位置づけ、自らをどう称していくのか、それぞれの文化との接し方とメンタルヘルスとの関連はどのようにになっているのか。また二文化の統合の概念や自由人の概念は、在日コリアンではどのように解釈されていくのか。彼らの日本滞在を巡る複雑な心理については、関連領域からの示唆は得られていても、精緻な心理学的な研究はあまり蓄積がありません。他国の移民などの異文化滞在者研究に比して、未だに

心理学的な解明が乏しく、研究は手探りといえます。話題提供者が、探索的な研究から開始して、研究のパラダイムをどのように見いだしつつあるのか、じっくりと話を聞く機会を設けたいと思います。

参加費用：無料（簡単なお茶会：200円 別途）

申込み方法：10月30日（日）までに、担当者・田中共子（tomo@cc.okayama-u.ac.jp）まで、メールでご連絡下さい。心理、社会、保健の分野の方を中心に、複数の文化に触れながら生きていく人の心理、長期の異文化滞在者の心理に関心のある方のご参加をお待ちしております。若手や学生の方が研究のヒントを探したり、ネットワークを作ったりするきっかけとしても役に立ちたいと思います。地区会員以外の方も、どうぞおいでください。

新入会員紹介

会員資格	氏名	所属	研究分野等
一般	杉田陽出	大阪商業大学	対人コミュニケーション、異文化コミュニケーション
学生	大野ジュンコ	関西大学大学院 博士課程	多文化社会における市民性
学生	金井里弥	東北大学大学院 博士課程	教育学、比較教育学
学生	曾永宏	日本大学大学院 博士課程	ジェンダーと空間の老年学
一般	舘山丈太郎	独立行政法人国際協力機構(JICA)	開発援助
学生	李裕淑	京都大学 博士課程	東洋思想
学生	吉田直子	聖心女子大学大学院 博士課程	国際理解教育
一般	出口真紀子	神戸女学院大学文学部英文学科	文化心理学・英文アカデミックライティング
学生	畠山浩子	東京外国語大学大学院 博士課程	日本語教育
一般	石橋敬太郎	岩手県立大学盛岡短期大学部	英文学
一般	熊本早苗	岩手県立大学盛岡短期大学部	アメリカの多文化主義、岩手における多文化共生
学生	李承赫	一橋大学大学院 博士課程	多文化教育、教育社会学
学生	芝野淳一	大阪大学 修士課程	教育社会学
一般	竹内真澄	明海大学外国語学部	リタイアメント層の異文化居住
一般	田村稚	国際医療福祉大学	英語教育
学生	谷口真紀	関西学院大学大学院 博士課程	言語文化学（新渡戸稲造研究）
一般	吉原秋	岩手県立大学盛岡短期大学部	西洋法制史
一般	湯澤剛	長野県上田染谷丘高等学校	L2 習得における個人差要因の研究

（2010年10月27日～2011年4月30日現在）

< お知らせ >



ハンガリーシンポジウム（2009）抄録集刊行

多文化関係学会の国際研究活動の一環として、2009年3月にブダペスト商科大学で開催されたシンポジウム”Synergy of Cultural Dialogues”の抄録集を刊行いたしました。多文化関係学会会員7名とハンガリーの日本研究者6名が行った研究発表やパネル討論、講演などの原稿の一部と、パワーポイント資料、および、ハンガリーの新聞に掲載された記事などをまとめたものです（93ページ）。ご希望の方は、若干の残部がありますので、事務局までご連絡ください。

松田陽子(兵庫県立大学)

Web 委員会より

Web 管理委員長：久保田 真弓

■ 会員専用サイトでのご所属・ご住所等の変更

ご所属やご住所、電子メールアドレスなど登録事項に変更がある方は、多文化関係学会ホームページの学会員専用サイトにて登録情報をご変更ください。なお、ID およびパスワードがお分かりにならない方は、久保田（mkubota@res.kutc.kansai-u.ac.jp）宛にご連絡ください

■ 登録情報変更手順

- 1.多文化関係学会ホームページ（<http://www.js-mr.org/>）にアクセスする。
- 2.学会員専用サイトに会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンを押す。
- 3.登録情報更新をクリックする。
- 4.変更点を修正して、一番下の更新ボタンを押す。

関連学会案内と編集後記

▼関連学会案内▼

立教・異文化コミュニケーション学会

第8回年次大会

2011年6月11日

立教大学

異文化間教育学会

第32回年次大会

2011年6月11・12日

お茶の水女子大学

日本学術会議フォーラム

アジア・太平洋地域におけるトランスナショナリズムの展開～社会科学からの展望

2011年6月18日

日本学術会議講堂

日本コミュニケーション学会

第41回年次大会

2011年6月18・19日

西南学院大学

～編集後記～

まず、このたびの東日本大震災で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。地震・津波・原発事故と、未曾有の複数の、また広範囲にわたる被害を受け、被災された方々への支援と共に、日本は一丸となって復旧・復興に取り組んでいかなければなりません。当学会でも、研究者として何ができるかを考え、ワーキンググループを立ち上げました。ニュースレターでの特集を皮切りに、7月には関東地区研究会で、また9月には第10回年次大会で特別枠を設け提案や発表が行われます。是非、会員の皆様にも積極的にご参加頂ければと願っております。あとになりましたが、これまで松永様が務められたNL委員長を、今回より大谷が引き継ぐこととなりました。至らない点多々あることと思いますが、皆様からのご意見をもとに、よりよいニュースレターづくりを目指す所存でございます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

(NL委員 古谷真希、大谷みどり)

「学会事務局業務委託に関するお知らせ」（その2）

学会事務長 抱井尚子

多文化関係学会では、今後の円滑な学会運営のために本年度より事務局業務の一部（会員管理および会費請求・徴収）を横浜市の「学協会サポートセンター」に委託することになりました。このお知らせは、既に前回お届けしたニュースレター第18号を通してご存知の方も多いかと思います。今回は、業務委託に伴う新たなシステムについて再度お知らせすると同時に、前回のニュースレターに記載された内容に対する変更点・追加点（【注1】から【注3】を参照）についてもみなさまにご報告致します。

(1) 所属・住所・資料郵送先・メールアドレスなどの個人情報についての変更は、学会HPの会員専用サイトからご自分でデータの更新をお願い致します。（会員サイトに入るためのパスワードをお忘れになった方は、WEB委員長の久保田真弓理事 <mkubota@res.kutc.kansai-u.ac.jp>までご連絡ください。）

(2) 学会費請求が原則4月に変更になります。（今回は業務移行の関係から会費請求が5月となりました。今年度以降は、3年連続滞納された場合は、自動的に「退会」処理をさせていただきます。）

(3) 学協会サポートセンターから送られてくる会費請求の手紙には、みなさんの会員番号が印刷されます。会員番号は6桁で表記されますが、上3桁（560）は学協会サポートセンターのデータ管理番号であり、学会ホームページの学会員専用サイトにお入りになる際に必要な会員番号はこれまでどおり、3桁の数字（印刷された6桁番号の下3桁）となります。

(4) 業務委託に伴い、これまで会員が確認可能であった「会費納入」情報は、今後は見るができなくなりますので、会費納入状況に関する問い合わせは、学協会サポートセンターに直接ご連絡ください。（メールアドレス：scs@gakkyokai.jp）

(5) 2011年度より70歳以上の会員については「シニア」会員として登録することが可能となります。シニア会員の会費は4,000円となります。

(6) 退会を希望される場合は、学会事務局（admin@js-mr.org）にご連絡ください。その際学協会サポートセンター（scs@gakkyokai.jp）にもCCメールを送信してください。

(7) 学協会サポートセンターにメールを送信する場合、件名には必ず【多文化関係学会】と、学会名を記載してください。

【注1】項目（1）の変更点について：

前回のニュースレターでは学協会サポートセンターを通して個人情報の更新をお願い致しましたが、WEBシステムの更なる改善により、ご自分でデータ更新が可能となりました。

【注2】項目（4）の変更点について：

前回のニュースレターでは「会費振込用紙」に会員番号が印刷されると書きましたが、会員番号は「会費請求の手紙」に印刷されます。

【注3】項目（6）と項目（7）が新たに追加されました。

以上、わかりにくい部分がありましたら、事務局にお問い合わせください。今回の業務委託により、会員の皆様へのサービスをこれまで以上に向上させ、学会の持続可能な運営が実現することとなりますので、どうぞご理解とご協力をお願いいたします。

